



2019年 6月16日
旭川地区ミニバスケットボール連盟 技術委員長
中 川 明
(文責：赤 坂 准)

2019年度 当麻大会 総評

今大会では、走ることを主体に取り組んできたチームが勝ち上がってきたという印象を受けました。春季大会の課題として挙げられていた、リバウンドからのファーストブレイクやランジッションを意識して取り組んできたことが、高い得点力につながりそのような結果になったと考えます。また、以前より1対1の状況が多く見られるようになり、強いドリブルでシュートまでもっていくプレーも多かったと感じます。これらは、ショットクロックの24秒の適用やマンツーマンディフェンスの推奨の成果ともいえるべきことだと思います。

しかし、以下のような課題も見られました。オフェンスにおいては、2つあります。1つ目は、ドリブルが主体のプレーやドリブラーに対するスクリーンが多いということです。強いドリブルや速いドリブルによる攻撃は局面において非常に大切です。しかし、依然として1人抜いた後、残りの4人が待ちうけているところへ無理にドリブルでアタックしているという状況が多く見受けられます。結果として、プレーが単調になり、途切れてしまったり、ボールを取られたりしています。今後は、もっとムービングとパスを有効に使用して、ディフェンスを揺さぶることが必要だと考えます。それにより、スペースをつくり2対1もしくは、1対0といった数的優位な状況を作り出し、シュートの成功率も上がると思います。また、そのようなプレーを展開していくことで、プレーの幅を広げ技術の向上にもつながると思います。そのためには、ムービングレシーブやパスの技術をさらに磨くとよいでしょう。2つ目は、時間内に攻めきることができず相手ボールになるケースが多く見られたことです。時間内にシュートにつなげるためには、ファーストブレイク→セカンダリーブレイク→ハーフコートオフェンスという意識で24秒間のオフェンスを連続的に行えるよう意図的に組み立てていくことが必要だと考えます。

ディフェンスにおいては、どのチームもマンツーマンをしようという意識の向上が見られました。しかし、オフボールマンのディフェンスでは指差しやミドルラインの意識はあるものの、ボールマンへの意識が強くなってしまい、自分のマークマンへのディフェンスが疎かになったり、低い位置にステイしたりしている状況が多く見られました。これでは、きちんとしたマンツーマンディフェンスを育成しようという本来の趣旨からは離れてしまいます。こらからも、オフボールマンのビジョンの確保と正しいポジショニングを日々の練習で身に付けていくことが必要だと考えます。

最後に、どのプレーにも共通していえることとして、「よい状況判断力」をつけることが重要だと考えます。そのことで、ミスが少なくなり、結果として思い通りのプレーを展開することにつながっていくでしょう。「何のためにそのように動いたのか」という意図と、「どのように動くのか」という具体的な方法を視点として、今一度練習に取り組み、より高いレベルの中で競り合うことで、技術力や競技力をさらに向上させてほしいと思います。